# 終　章　　研究のまとめ

## 第１節　本研究の成果と課題　～生徒への事後アンケートから～

ここまで、１年間の研究の中で大学での研究、文書館での文献調査、ＧＩＳの研究、全国の研究会や学会の参加、研究発表大会や研究授業の参観、町内から遠方までの現地調査や巡検、行政への取材、上里町や他市町村の施設での資料収集、そしてこれらを元にした素材の整理・分類、教材の開発、検証授業と、行ってきた様々な取組について記してきた。この多岐にわたる研修全体を振り返り、成果と課題を明らかにすることで、自分自身、お世話になった方々、ともに社会科を学ぶ先輩方・仲間・後輩、何より生徒たちの社会科学習の今後につながる踏み台としていっていただきたいと考えている。

### （１）上里中２年生の検証授業後アンケート結果と分析

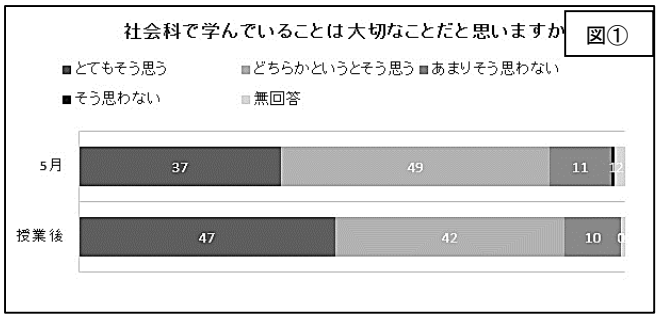
まずは、成果を考える上での材料の１つとして、検証授業を実施した上里中学校２年生の全クラスに実施した事後アンケートについて検討する。５月に実施した現状把握のためのアンケートと比較して成果と課題を明らかにする意図である。ただし、実施月は５月と１月であり時期に大きな間隔が空いているため、検証授業を行ったわずか１か月での結果と単純に見ることはできない。５月から 12 月までの日頃の授業の積み重ねの上に今回の検証授業が成り立っているからである。また、アンケート結果は数値としてグラフで表現されるが、その回答の根拠は、生徒それぞれによって段階や深みに相当差があるだろう。加えてアンケートは検証授業の授業内ではなく、後日に学年の先生に依頼して実施していただいたものであるため、アンケート実施時の状況や気分、確保できた時間によっても内容の意味合いが異なる場合がある。よって、数値の上下が取組の効果を表したものとは言い切れないことを考慮しなければならない。また、例えば学習対象をより深く知ったことによって、意識や見方が変わることもあるだろう。

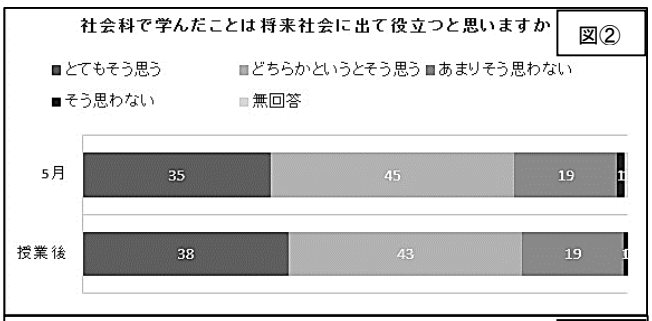
それを踏まえたうえで、５月と１月のアンケート結果を考察し、成果を考えるヒントとしたい。

ア　２度のアンケート結果の数値の推移

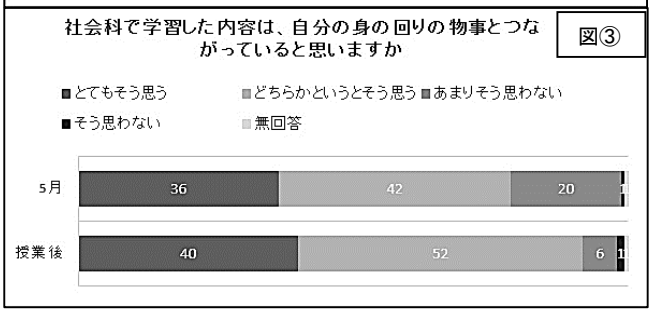
**実施日と人数　授業前　５月下旬　　人数　159 人**
**授業後　１月末～２月初旬　　人数　145 人**

※特に断りがない限り、便宜上「とてもそう思う」を「ａ」とし、以下順番に「そう思わない」を「ｄ」と表記する。

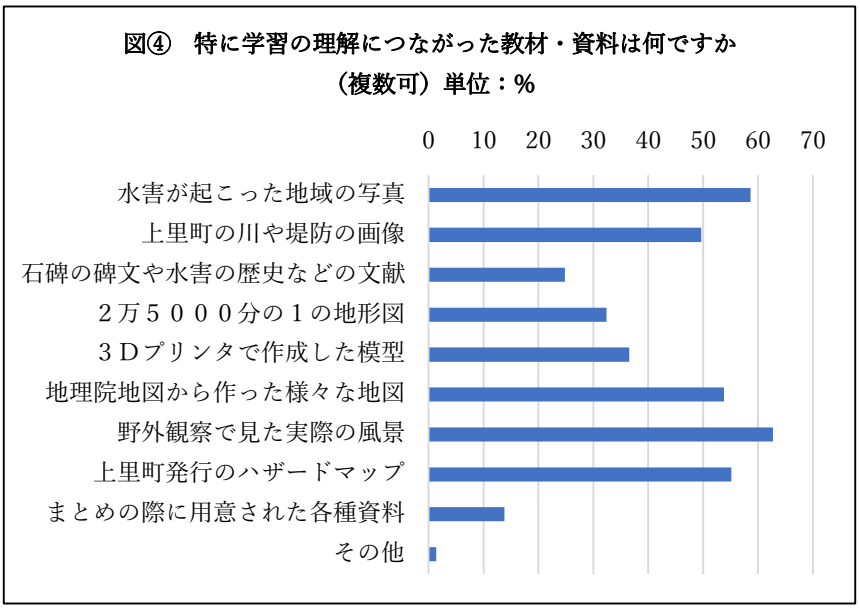


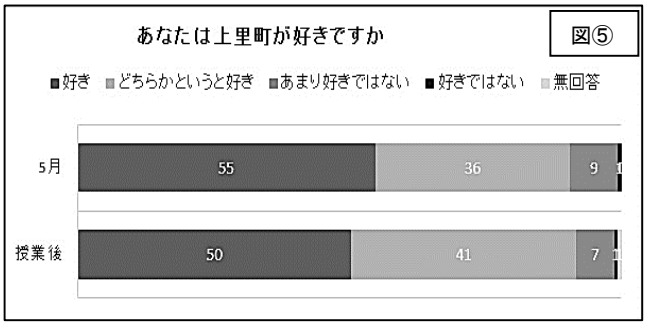



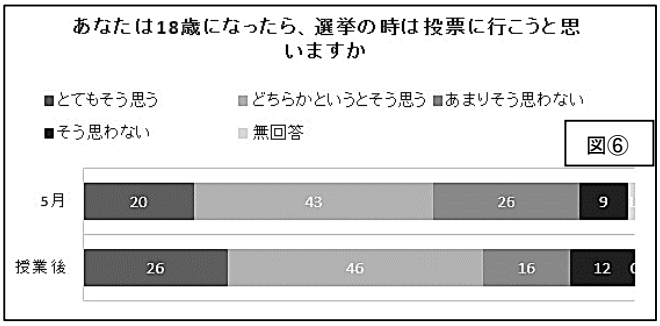

①、②ではａとｂの合計の数値に大きな違いは出ていないが、ａの割合が上がっており感じ方が強くなっていると見られる。③では、ｂの数値が大きく伸びた。学習した内容と社会との接点をより実感できた生徒が多くなっていると見ることもできる。

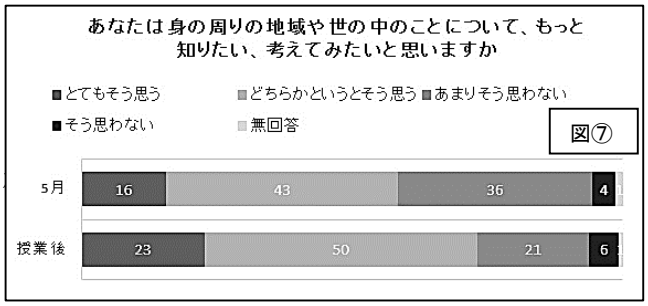


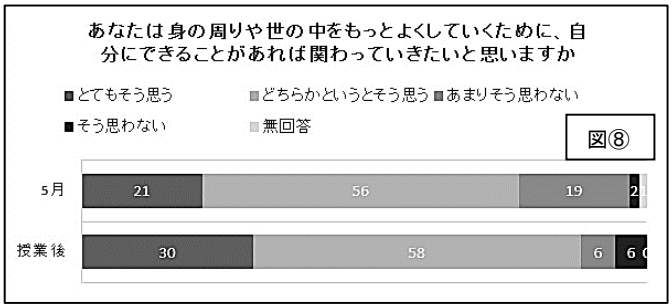
④では、野外観察が最も多くなり、生徒の振り返りの内容と同様の傾向となった。資料面では、実際の洪水の写真や画像が多く、文献やグラフなどよりも直接的な視覚に訴える資料が生徒には印象に残ったと考えられる。ハザードマップや地理院地図で活用した地図はまとめ作業の中で加工したり比較し読み込んだりしたものであるため、理解の中心であったことが考えらえる。



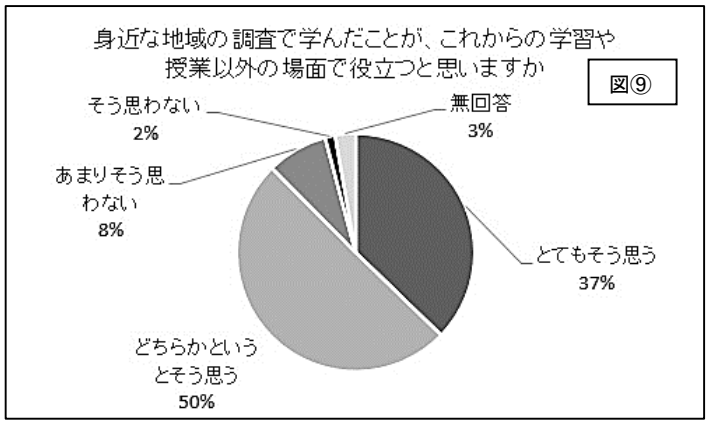




⑤に関しては、ａとｂの合計は事前アンケートとほぼ差はなかったが、ａの数値が減少している。これは事前から予想していたことでもあり、事前の「お店が多い」「自然が多い」「人が優しい」などのイメージ先行の内容に対して、しっかり学ぶことで様々な側面が見え、特に今回は水害を題材としたため、過去に多く水害が起っていたことや、対策の受け止め方によっては、理解が深まることによって数値が減少する段階に移ることはあり得ることである。「よりよい地域の在り方に関心を持って参画していく」ということと「好き嫌い」はまた異なる問題であり、この数値は学習の深まりを必ずしも反映しないと言える。具体的な生徒の記述内容については後述する。

⑥～⑧では①～③と同様に、ａとｂの合計の数値が向上している。特に⑦と⑧では数値の向上が大きかった。数字の上では、地域の社会的事象や身の回りの出来事に関心が高まり、関わっていこうという意識が高まったことを見ることができる。一方で、⑥と⑧ではａとｂの合計はわずかに増えたものの、ｄの値が増えている。これをどう捉えるかはここで考察することは難しいが、ａとｄがともに増えたという点は興味深い。

⑨は、質問の内容から、この授業の成果としてみることが可能であろう。約９割の生徒が、この単元で学んだことが今後の学習や生活などの場面で役に立つと回答した。記述内容でも後述するが、町や自分の身の回りに対する新しい見方や認識が得られたことや水害という直接自分の生命や財産に関わる課題であったため、必要感や具体的な実感を持って学ぶことができたのだろうと考えられる。




イ　生徒が挙げた地域的特色の比較と考察

**５月　上里中２年生**

**上里町について全く知らない人に紹介するとしたら何を紹介するか、４つ挙げてください。**（多かった順）

①お店が多い・大型店がある
②自然が多い
③小麦
④田畑が多い（畑が多い）
⑤こむぎっち
⑥人が優しい・親切
⑦野菜栽培が盛ん
⑧サービスエリア
⑨神保原駅
⑩静か

**検証授業後　上里中２年生**

**「身近な地域の調査」の学習を通して、上里町の地域的な特色はどんなことだと感じましたか。具体的に４つ挙げてください。**（多かった順）

①お店が多い・大型店がある
**②災害・水害に関する内容**
**③交通に関する内容**
**④高低差・段差など地形への言及**
⑤田畑が多い（畑が多い）
⑥農業・野菜が盛ん
⑦自然が多い
**⑧高齢化している・高齢者が多い**
**⑨避難・避難場所に関する内容**
**⑩歴史・昔のことに関する内容**

※多少書き方に違いがある場合でも、集計上同じ内容として分類している。例えば、右の②「災害・水害に対する言及」には、「災害が少ない」「昔は災害が多かった」「災害にあいやすい土地」「さまざまな水害対策をしている」などの記述が含まれる。また、右の⑩「歴史・昔のことに関する内容」には「石碑が多い」「昔のものが残っている」「昔からの歴史がある」などの記述が含まれる。

「上里町の地域的な特色」を記述させる問いでは、５月と明らかな違いが見られた。「身近な地域の調査」の学習直後であることから、どうしても学習内容に関する内容が多くなるとはいえ、災害の歴史や災害対策、他地域との結びつきや交通網の充実、土地の高低差や段差とそれにともなう土地利用の工夫、高齢化の課題や高齢者の多い地区などの記述をした生徒が非常に多く見られた。

便利や楽しさなどの直接的・イメージ的なものから、自然や地形の特色、歴史的背景（先人の取組）、現在の災害の脅威や課題、それに対する取り組みなど、より具体的で学習した内容を生かした見方に変化していると考えられる。

ウ　授業を通しての変容を問うた記述に関する考察

これまでアンケートの推移を見てきたが、数値では生徒の内面や意識の変化まで十分に読み取れない部分もある。成果と課題の検討を深めるためには、「授業を経ての自己の変容や成長を生徒自身がどうとらえているか」を見とることが非常に重要であると考える。これを問う質問について、以下に、

（問）**「『身近な地域の調査』の学習を通して、学習の前と後で、あなたの中で『以前に比べこんなことができるようになった』とか、『こんなふうに物事の見方や考え方が変わった』とか、『こんなことが今後に生かせる』などと思ったことを、具体的に書いてください。」**の回答の一部を分類したものを示す。

【地理的な技能について言及した内容】

・地図が良く読めるようになった、土地の見方が変わった。

・資料と資料の組み合わせで考察できるようになった。

・前より資料を使ってまとめたり説明することができるようになった。

・等高線が読めるようになった。町の段差で浸水しやすいかどうかわかるようになった、水害時の浸水しにくい避難場所がわかった。

・地図を複数照らし合わせて活用することができるようになった。

【自分の身近な地理的事象についての捉え方が変容した内容】

・案外普通だと思っていたものに意外と変化があると予想できるようになった。

・周りの土地を見て、なぜこうなっているのか考えるようになった。

・坂道を見るときに土地の傾斜を気にするようになった。

・今まで登校中はあまり地理的なことを考えていなかったが、授業をしてから耕作放棄地を探したりするようになった。

・地理院地図を細かく扱えるようになった。普段何気なく通っている道もよく見ると昔の特色が残っていて面白かった。

【町の過去や歴史について言及した内容】

・昔のものはほとんど意味があって作られたことなど興味を持つことができた。

・昔の人はすごく頭がいいんだと思った。

・今まで全く町の特徴に関心がなかったけど、野外調査や昔の水害の資料を見て昔の人たちの工夫していた点や洪水から守る取り組みをしていたことが分かり、少しずつ関心が持てた。

【上里町の特色や課題、取組について新しい見方が持てた内容】

・自分が普段住んでいる上里町なのに知らない過去の被害や今の地形が知れて面白かった。

・学習前は自分の町ぐらい全部知っていると思っていたけど、水害の被害のことなど知らないことばかりだったので、授業をしてとてもよかったと思った。

・上里の地図を見て通学路を気にしたら、本当に段差があったりしたので、上里町に興味を持った。

・昔はあまり上里の昔や水害など地域について興味がなかったけど学習を通して「こんなことがあったんだ」と町についてよく知れて、周りの地形とかに少し関心を持つようになった。

・以前より地域ごとの浸水する深さなど地図の見方が分かるようになった。上里町は災害の対応などあまりしていないと思っていたけど､授業を通して坂や高低差での土地の利用などが分かり上里町もたくさん対応していると分かった。

【自分の生活や具体的な対策に関わることに直接言及した内容】

・一生町に住むつもりだったが、ハザードマップなどを通して「本当に安全なのか」疑うようになった。家を建てるときにはきちんとその地域のことを知って建てたい。

・自分の住む場所の地理を知ることで自分の安全を守ることにつながると思った。

・地図を読みどこが危険な地域なのかわかって、その地域ではどう対策すればいいか考えるようになった。

・段差があると川が通っていたんだとか、他の地域の水害情報も見るようになった。

・自分たちの地域の地形を理解して災害が起きた時のことをより深く考えることができた。

記述から読み取れる生徒の気づきや変容の段階も様々であるが、ほぼすべての生徒に、町や水害のことへの見方や考え方、調べてまとめる技能、自分の町や他の市町村についての認識など、何らかの手応えを持った様子が見られた。地図や資料を複数比較しながら地理的な事象を考察していく技能の高まりや、今まで知らなかったことに対する驚き、フィールドワークを行うことの楽しさや、机上での調査と実際の風景が合わさった時の学習の手応えなどが感じられる。ここで得たことや考えたことが今後の生徒の社会科の学習に生かされるだけでなく、家庭での話題の広がりや地域への見方や関心の変化につながり、将来にわたって地域社会や世の中に関心を持ち関わっていこうとする態度の高まりが期待できる。

**（２）研究の成果と課題**

本研究では、地域の魅力や特色・課題を含む素材を掘り起こして教材化し、地図やグラフなどの資料、ＧＩＳの活用などの方法で学習内容を生徒の身近なものとすることで、生徒が「見方・考え方」を働かせて主体的で対話的な学びを促し、地域への関心や理解を深め、よりよい地域や社会の在り方に関わっていく「社会参画」につながっていくのではないか、という考えのもと実践を進めてきた。これに対して、上記のアンケート回答や記述から見た内容と、１年間の実践を振り返って、成果と課題として整理したい。

**【研究の成果】**

①地域資料を適切な形で教材化することによって、生徒の関心・意欲を高め、新たな視点や視野の広がりを得て地域への関心を高められることがわかった。地域への理解を深める中で、地域の特色や課題をつかみ、それに対する取組や自分の振る舞いを考えるなど、地域への参画意識を高めることができた。

多様な観点から地域の地理的な特色や課題、歴史的背景などを際立たせることのできる素材を取材、収集した。それらを教材化して授業の中で効果的に活用することで生徒の地域への着眼点や課題の捉え方、「社会参画」の意識に多くの変容を見ることができた。生徒たちの地域や身の回りの事象を見る視点においては、文献で地域の歴史を調べたり、地図やグラフで町の現状を読み取ったり、野外調査をしていく中で変容が見られた。「上里は災害がないと思っていたがこれまでの対策があって安全だとわかった」、「通学路の坂道が今までと違うように見えた」や、「町の見方が変わり、他地域のことも調べたいと思った」などは、これまでになかった視点である。また上述の通り具体的な「構想」として形にすることは不十分であったが、複数の地図や資料を比較しながら読み取り、特色や課題を見出し、よりよい地域の在り方を考えていく活動で、上里町や他地域で実際に取り組まれている対策などを調べて考えることを通して、人口分布や交通網のつながり、自治体と企業の関係など、様々な地理的条件からどのように解決策を考えるのかという考え方の高まりや変容が、生徒の作ったまとめ地図や振り返り記述などから見られた。

自分の町の知らなかった側面が見えたこと、地域の安全や対策について具体的な内容をもとに学習したことがこれらの変容につながったと考えられ、地域教材とその活用の意義について一定の成果が得られたと言えるだろう。新学習指導要領にある通り「見方・考え方」が社会的事象の意味や特色、課題を考察、把握したり解決に向けて構想したりする際の「視点や方法」であるならば、地域教材を活用して生徒の地域の特色や課題を捉え、解決策を考えることは「見方・考え方」を高めるのに効果的であるといえる。

また、私自身が地域を回って調査・取材を行い、他県や他地方の事例についても現地調査や資料収集を行ってきたことで地域への理解を深めることができた。本研究では当初、地理的な内容を中心に資料収集や教材化を進めていったが、現在見られる地域の特色や課題を明らかにしようとすると、その事象の歴史

的な経緯や背景について調べなければ分からないことが多かった。逆に、町の形成や交通・水運などの歴史的な事象の背景には地理的な条件が必ず存在した。このように、地理的な事象と歴史的な事象は切り離して考えることができないと実感できたことも地域を調査する中で得られた成果である。

②ＧＩＳや３Ｄプリンタなどの活用方法に関する研究を行い、様々な教材や資料の作成や比較の方法について知識と技能を深めるとともに、それらの活用が地域教材の開発に非常に有効であることと、生徒の学習の深まりに効果的であることを確かめることができた。

授業での実践から、ＧＩＳの活用が学習の理解や地域教材開発に効果が大きいことが確認できた。生徒が常にタブレット等で活用することはあまりできなかったが、教員が説明するために画面上で地図や３Ｄを示すことや、ＧＩＳで作成した地図を印刷して野外観察やまとめ地図の作成に使うことで、十分に有効な使い方ができると分かった。また検証授業の章でも書いたが、手作業や現地調査とＧＩＳや３Ｄプリンタの模型などの組み合わせが非常に学習を深める効果が大きいと考えられる。

今回の研究を通して、私自身がこれまでほとんど知らなかった多様なＧＩＳの活用について知識や技能を深められた。ＧＩＳに関しては特別な技能や環境も必要ないため、「知っているかどうか」だけで授業でできることの幅が大きく変わってくることである。まだまだ現場ではＧＩＳが広まっていないので、勤務校や地域でも積極的に広めて実践事例を増やし、より洗練された授業での活用方法を練り上げていければと思っている。

③地域素材の３年間を見通した活用に向けて、地理だけでなく歴史や公民でも新学習指導要領の学習内容に沿って活用可能な素材を一覧表として整理することができた。

収集した資料や、教材化の可能性のある素材を、教材化できたもの、途上のものを含めて、新学習指導要領に合わせて一覧表として整理することができた。地域に対する関心や意識を高めていくのに、地域調査の単元だけでは十分に行うことはできない。３年間の中でどこにどのような素材の活用が可能かをほんの一部だけではあるがまとめられたことで、２年間を通しての学習を経て、「地域の在り方」でより深い考察・構想を可能にし、さらに３年間の学習の中で公民での各単元でより地域や自分の周囲に根差した視点で学習を進め、卒業時には社会科が目指す「公民的な資質・能力」に少しでも近づくことができるよう、今後も引き続き研究や授業実践を進めていきたい。

このまとめ一覧は上里町以外の他の市町村でもヒントとして十分適用できると考えている。例えば、「武蔵国郡村誌」や各「市町村史」などは県内各市町村や全国の地域のことが記載された膨大な資料である。一覧表に資料名や取材先などを数多く載せられたことで、上里町以外の地域のことを教材化しようとした際にも、どのような文献や地図を調べればよいのかの参考となるのではないだろうか。今回はこのような形で作成したが、このリストは完成ではなくこれからも書き加え更新していきたい。

④「身近な地域の調査」の実践について、教材開発や地図・資料の作成、単元計画の作成などを通して、実践の記録や成果を今後の学校の蓄積とすることに加え、まとめ地図など下級生への見本を残すことで次年度以降の学習の改善に道筋をつけることができた。

「身近な地域の調査」は第２学年の終盤に位置付けられていることもあり、年間の学習内容の量や時数の問題から、まとまった時間の確保がされにくい、言い方を変えれば軽視されやすい単元である。教科書の内容はあくまで例であり、資料は教員自身が作成しなければならない。また野外調査や追究・発表と説明など準備や実行に様々な手間がかかる内容が位置付けられており、様々な意味で時間的・心理的な負担が大きい単元と言える。今回は研修の機会を与えていただいたことでじっくりと準備をし、２学年担当の津久井先生のご厚意で実質 10 時間に及ぶ実践が実現した。生徒は地図などでまとめる学習の経験が少なく、前年度までの見本もない中で、苦心しながらも様々に考えながら工夫してまとめ作業を進めていた。今回の取組が基準点となり、次年度以降の学習のさらなる充実に道筋が開け、「上里中の地域学習の実践」として、単元の再編以降も授業を改善し積み上げていくスタートラインとすることができた。

**【研究の課題】**

①３年間を通した地域教材の適切な活用を通して、地域への関心や、よりよい地域の在り方への「構想」の力を高め、３年生に向けて「社会参画」の意識をどのように育てていくか。

検証授業の項の繰り返しになるが、地域資料やＧＩＳの活用の成果として生徒たちは地域の今までにない側面に気づき、地域の特色や課題、それに対する取組などを、個人レベルではある程度考えることができたが、その取組の実現可能性や妥当性などの見方から、グループや学級全体で練り上げるまでの学習は行うことができなかった。中学校社会科の目標は「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」である。そのためには「知る」だけでは不十分で、「構想」する段階までどのようにすれば達成できるのかを考えていかなければならない。今回授業を行った「身近な地域の調査」は、新学習指導要領の中で初めて「構想」という語句が現れる単元である。例えばここでは基礎として構想する活動の取り掛かりを作り、それを地方自治などの公民の学習につないでいければよいのか、そのための２年生の時点での「構想」の到達点はどの程度なのかなど、３年間を見通して、地理・歴史両方の学習の中で生徒の力を高めて３年生につないでいけるような取り組みを考えていく必要がある。

②「身近な地域の調査」だけでなく、歴史と公民も含めて３年間を計画的に見据え、学習内容を身近にする地域教材の活用をどのように進めていくか。

①と関連する内容となるが、社会参画の土台として、身近な地域への関心や愛着、地域に対する理解が必要であることは繰り返し述べた。そして、これらは一朝一夕に身に付くものではない。また、特定の単元で強く打ち出しても不十分であろう。様々な学習内容や活動を通して、３年間を見通して育てていくべきものである。本研究の中で作成した地域素材の一覧表を叩き台として、さらに深めていくことである。

また、地域教材だけでなく、資料の読み取りや地図の活用、新聞や地図の形式でのまとめ方やさまざまな発表の仕方など、技能の面においても３年間・１年間の視野で系統的に指導していく必要がある。

③発掘した地域素材、開発した教材をどのように精選し、生徒の学習に適した内容に最適化していくかの検討。資料や教材化の方法を学校種を超え学校や町の蓄積としてどのように共有化し、深めていくか。

今年収集した資料や素材はかなりの数に上り、実際に教材化できたものはごく一部である。また、その中でさらに授業で活用できたものはさらに一部となっている。素材が数多いということは、今回の検証授業の中で生徒に対して提示した資料が多すぎたり整理しきれていなかったりしたことで、生徒の活動に戸惑いや迷いが出てしまう原因にもなってしまった。

まだ素材の段階で留まっている資料をこれからどう適切に教材化していくかを今後も研究し続けていかなければならない。中にはすぐに役に立たないものや、教材として適さないものも多くあるだろうが、可能性のある素材をこれからも広く求めていきたいと考えている。また、研究内容を広く共有することで、自分以外の諸先生方の観点で、それぞれの素材にどのような活用方法があるのか、またどのように取捨選択して精選していけばよいのかをともに追究していくことも、研究の深まりにつながるだろう。とりわけ小学校で地域学習は重視されるため、今回の研究内容を小学校３年生からの学習にも生かすことができれば地域に関心を持ちよりよい地域づくりに向け考えていく子どもを豊かに育てていけると考える。

そして、これらの地域教材やＧＩＳの活用の成果や今後の可能性を、私一人のものとせずに学校内や地域の蓄積として共有していくことが重要であると考える。さらに学校や近隣だけでなく、今年度知り合った先生方も含め広くネットワークをつなぎ、よりよい実践例を広げていきたい。

## 第２節　今後に向けて

ここ数年で世界の動きは大きく変わり、それまでの地域統合やグローバル化一辺倒の時代ではなくなったと感じる。そんな中で、これからはより地域のことをよく知り、地域に根差した上で、もっと大きなよりよい社会の在り方を模索していく時代ではないだろうか。

地域のことを深く理解して参画していくということは、自分の地域を無条件に好きになればよいのではなく、地域が成り立っている条件や背景をしっかりと知って、地域への理解と愛着のもとに、時には批判的な見方も持ちつつよりよい在り方を考えていく姿勢だろうと考えている。それが地域だけでなく、社会全体や世界の在り方を考える姿勢の基礎になっていくのではないか。そしてこの姿勢や態度を育てていくことは、学校だけの取組では不可能であろう。行政や文化的機関、地域の人々などとも積極的に連携していかなければならない。様々な機関や人と協力できたことも今回の研究の成果であり、地域に根差した教育をこれからも実践するため、今後も多くの方面と関係をつなぎ、深めていく必要がある。

１年間の研修は終わることになるが、ご指導いただいた平澤先生からは、「研究は１年間で終わりではなく、あくまでこれからのライフワークのスタートに立っただけだ」という言葉を研究期間を通してたびたびいただいた。まさにその通りであり、１年間を経てまだ出来ていないこと、これから調べたいこと、深めたいことが増える一方である。研究の成果として形にできたものは本当に一部分であり、この先も地域教材やＧＩＳに対する研究をライフワークとして据え、可能性ある素材や教材の収集や開発、ＧＩＳの効果的な活用や、より日々の授業の中で無理せず導入しやすい工夫を続けていきたい。

あくまで学習の中心は生徒と、生徒に理解させたい学習内容であり、教材はそれを実現するための手段である。それを忘れず、今後も「見方・考え方」を働かせた深い学びの実現のために研究を続け、よりよい地域、よりよい社会を担える資質・能力を備えた公民として社会に参画していく生徒たちを育てるために学び続けていきたいと考えている。

また、ぜひこの研究の内容についてのさらなる情報や忌憚のないご意見をいただきたく思っている。もし読んでいただけた際に感じるものがあれば、お伝えいただければ幸いである。